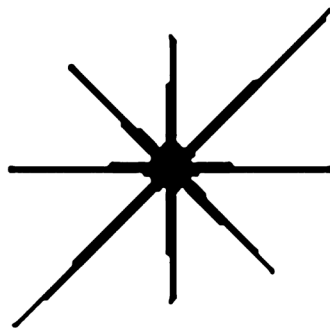


コメット通信 11

[21年6月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱 (5)

——「ブラック・ノート」抄

中村邦生

30 9という数字に呪いはあるか

「ブラック・ノート」の9冊目の9ページに何が書いてあるのか、気になりだした。そんな取り留めのない気分が湧き起ったのはごく単純な理由からで、マーラーの交響曲第9番とピエール・ブーレーズがマーラーを論じたエッセイが影響している。

たびたび思い立つというわけではないのだが、夜も更けたというのに、一つの曲を異なった演奏で聞き比べたくなることがある。ピアノシモのアプローチの仕方、ソロ楽器のメロディの歌いだし、フィナーレのテンポ感、カデンツァといったように部分的な聞き直しも多くなり、眠気が遠のくどころか、いよいよ頭が冴えてきてしまう。ヒーリングミュージックを聞くような就眠の儀式とは正反対で、夜を拒み早く朝に辿り着こうという転倒した意識のまま時間を過ごす。

その夜は、マーラーの交響曲に気分が向いた。繰り返しよく聞くのは3番だが、久しぶりに9番となった。終楽章のあまりに美しいアダージョをはじめ、闇に吸い込まれ、深淵に身を浸していくような曲で、頻りに聞けるものではない。バーンスタイン指揮で、イスラエル・フィルハーモニーの演奏会を体験した音楽評論家が、「告別シンフォニーにふさわしい、言い知れぬ余情を残す、深遠な魂鎮めの音楽だった」と言ったことを思い出す。

カレル・アンチェル指揮、チェコフィルハーモニー。それと迷った末に、晩年のマーラーの悲劇的な人生への思い入れを背景に退ける、悠然としたテンポで純音楽的に鳴り響く演奏がいいと思い、カルロ・マリア・ジュリーニ指揮、シカゴ交響楽団のCDを選んだ。たっぷり、3時間はかかる。夜半の目覚めのまま、朝に辿りつくことになるだろう。

魔が差したと言ってしまうのは、いかにも大仰なのだが、曲の始まる前に、何気なく『ブーレーズ作曲家論選』笠羽映子訳（ちくま学芸文庫）を開き、「今日的なマーラー？」と何やら反語的なおいを放つタイトルのエッセイを眺めた。しかしこの「におい」は、まぎれもなく「臭み」で、オペラ指揮者として活動してきたマーラーの作曲上の痕跡を次のように記すのである。

交響曲という高尚な領域に、彼は演劇の邪悪な種を大量に撒き散らした。つまり、感傷性や、卑俗性や、無礼で耐え難い無秩序が、この[交響曲という]監視付狩猟地に騒々しく長々と姿を現わしたのだった。けれども、一握りの熱烈な愛好者たちは、死後の追放地で、寝ずの番をしている。

理解しやすい言い回しではないし、的確な指摘かどうかとも判らない。ただし、「熱烈な愛好者たち」は「一握り」ではないだろう。このような言い方をするブーレーズ自身、14枚のCDからなる『マーラー交響曲全集』というメモリアルな仕事を残している。情緒過多の熱演的身振りと距離を置き、楽譜を精緻に解析した美しいテクスチャーと芳醇な響きを実現したその卓抜な演奏は、私自身もその一人だが、多くの「熱烈な愛好者たち」を持つ。

しかしその夜遅く、私が反応したのはもっと素朴なことで、マーラーの音楽を守って「寝ずの番を

している」という文言だ。たまたま私は奇特にも「寝ずの番」をするつもりだったのだから。苦笑しつつ、同じページで目に入った文章がある。しばしば対になって登場するブルックナーとマーラーは、交響曲のカストルとポリュデウケス（ゼウスとレダの間に生まれた双子の神）であり、ひとつの繰り返されてきた神話があると、次のように続ける。

ベートーヴェン以降、9より先に行くことは不可能だという神話。交響曲の王朝は、それが運命的な数字を乗り越えようとするや否や、運命の襲撃に遭うのだ（その後、何人かの才能的により劣った作曲家はそうした壮挙に成功したが）。

この「神話」は、別名「第九番の呪い」として知られているものだ。ベートーヴェンが第九交響曲を最後に、第十番を完成させずに世を去ったことに始まった、交響曲第九番を作曲すると死が訪れるという因縁話である。ベートーヴェンのほかに、ブルックナー、ドヴォルザークが、交響曲としては9作で生涯を終えている。とりわけマーラーは重度の心配性からこのジンクスに取り憑かれ、第八交響曲の完成後、9番目の交響曲とするのを回避し、二人の歌手を登場させ、6楽章からなる疑似交響曲『大地の歌』を作曲した。結局、八番から迂路を通って第九シンフォニーまで行き着いたのだが、ブルーノ・ワルターによって初演されたのは作曲者の死の一年後だった。

ついでに言えば、「運命的な数字」の乗り越えに成功した「才能的により劣った作曲家」としてブーレーズの念頭にあるのは、あからさまに嫌悪を示すシヨスタコーヴィッチだ。精緻を極めた楽曲分析を進めるブーレーズの音楽的知性からすれば、楽譜的には凡庸で稚拙な曲に思えたのかもしれない。しかし、私には不当な評価と感ぜられる。例えば、代表作とは言い難い第九番に限ったとしても、バルシャイやスヴェトラノフの指揮で聞けば、怒り、嘲笑、皮肉、歓喜、断念といった錯雑とした自己緘晦の感情が、楽器間の多彩な対話の渦となって響き合い、聞き手の感情を揺らす刺戟的な交響曲だ。

第2次世界大戦ソヴィエト戦勝祝賀などというものは、当局に向けた表層的な意図にすぎない。

すっかり気が逸れて、気がつくと午前4時になっている。そろそろオートバイの音が近づき、新聞が届く時間だ。まだ眠気は来ない。9という数字に呪いはあるか。半ば冗談のように思い浮かんだ関心事ではあるが、就寝を先送りにして、「ブラック・ノート」の9冊目の9ページを確かめてみることにする。

31 「ご免なすって、どちらさんも、ご免なすって」

(9冊目, 9(8) - 15ページ)

いささか妄念が空回りしたかもしれない。「告別」とか「呪い」とか、9に特別な文章との遭遇を期待したのだが、そうした思い入れはあっけなくも外れた。9ページには、「リア王の母」と題する着想だけのメモ書きが、しかも朱字の斜線入りの消去の扱いで下半分に記載され、上のスペースは8ページから続く「ご免なすって、どちらさんも、ご免なすって」とタイトルのついた文が横切り、前書き風の文章の後に、うねうねと、酔狂な文体で15ページまで続いている。以下が全文だが、「リア王の母」の案文も、取り消しになっているとはいえ、無視するのは惜しい思いつきなので次の32に紹介しておきたい。

「ご免なすって、どちらさんも、ご免なすって」

借りてきた文学関係の本をあれこれ眺めるだけでも、まるで現代小説の伝家の宝刀のように、「マジックリアリズム」という言葉を散見する。ガルシア＝マルケスをはじめ、とりわけラテンアメリカ作家の特徴的な手法で、非日常、超常的な事象を平生の日常に生起する出来事のように、あえてリアリティに表現する方法、と差し当たり言えるようだ。私のように写真の仕事をしていると、意図的な狙いではないにせよ、偶発的にマジックリアリズムの映像が出現することがある。少年野球をしている小学校の校庭で、レフト方向に打ち上げられた白球を追うレンズが捉えた映像が一例だ。ちょうど近くの本立からウサギの飼育小屋に跳び移る猫がいて、その前足が空に伸び、遠近の詐術で白球をキャッチしにいく構図となった。

それはそれとして、私には落語の「首提灯」など、語り直し次第で、マジックリアリズムの面白い実例として示すことが可能な気がするが、はたしてどうだろうか。

——知ってるかい？ 剣の達人に切られると、あまりの腕の良さに、切られた当人も気がつかないほどだつてさ、ほんとうかい、でもよ、おれが自分で試してみたいなんて、これっぽちも考えているわけじゃねえぜ、でもさ、切られて鼻歌を唄うやつもいるって、聞いたよ、のどかな話で、けっこうなものだ。でも、侍っていうヤツは、困ったもんだね、なまじ両刀をさしているからさ、その気になりゃ、すぐに人殺しができる。だから、へたに怒らしちゃ危ねえことくらいは、町人なら子どもだつて知ってるさ。ところが、酒がまずいのよ、まずいって酒のことじゃなくて、酔っぱらって気がでかくなっていると、危ねえってということさ。飲んだくれて、勢いづいていると、つい侍が相手でも、からんだりする。こいつが困ったもんなんだ。

ウイーっと、いい気持の宵だね、よい、よいつてもんだ。それ、こりゃこりゃ、げぶー、あはは、ひさしぶりに品川でも繰り込むとするか、女に元気がいいところを見せてやろうかね、女がよ、おまえさんの顔を見ないと虫がおさまらないんだよ、なんて言いやがってさ、おれの顔は虫おさえの顔だ、えへへ、この色男め。あんたいつも強いね、なんて本当のこと言われちゃってさ、えへへのへ、この助平野郎め。

おっと、いけねえや、やけにさみしいところに来ちまったな、もう四つを打っちゃって、誰もいやしねえし、この頃、世の中ぶっそうだしな、こっちはたまたま懐があつたけえとくらあ、えっへ、あぶねえ、あぶねえ、げぶー、しょうがねえ、唄でもうたつて景気づけるかね、惚れ一た、惚れた女の深情け、金はいらない、心が欲しいー、泣いてすぎるも、夜明けが近いー、うひっとくら、惚れて、惚れぬく……。

「おいおい、おい、そこもと」

なんでえ、いきなりよー、おう、おそろしく背が高い野郎だね、上の方の重しが軽いやつほど背は伸びらー、おれは脳みそが特別醸造で、ずっしり重くてチビなんだ、文句あるか、ちくしょうめ、で、何か用かい、おじさんよ。

「おじさんとは、何を申すか」

何だと？ おめえのほうで、おいおいって言ったろう、おれが甥なら、てめえは叔父さんかい？ いいね、小遣いでもくれるのかい、この丸太ん棒め。

「人に向かって丸太ん棒とは、はなはだ乱言であるぞ」

何を言つてやがる。らんげんも、インゲンも、じゃんけんもあるかい、何の用なんだ、用があるなら、早くしろい、おれだつて、先を急ぐんだ、虫のおさまらねえ女が、首を伸ばしてお待ち

かねだい。

「それがしは、江戸表に勤番に参った者だが、土地不案内で道が判らん。麻布に帰るには、町人、どう参る？」

へっ、なんだ、道をきくのかい。町人、どう参るだと、どうとでも勝手な方へ行きやがれ、この田舎侍、足を互い違いに動かしてみろい、誰だって前に進むだろうが、東西南北好きなように、どんどこ歩きゃ、いずれは同じところに着くだろうよ。江戸っ子はつむじが曲がってるんだ、そんな道の聞き方じゃ、誰だって教えるもんかい、いやな野郎だな。

「おのれ、酔っておるから不憫を加えておったが、容赦ならん。これ、この二本差しが、そのほう目に入らんか」

てやんでい、そんな長いものを目に入れりゃ、サーカスで大人気の奇術師になれるぞ。それによう、たったの二本差しが恐けりゃ、鰻の蒲焼は食えねえや。気の利いた蒲焼なら、五本も六本も串を刺してらあ。そんな鰻、喰ったことはねえだろう、貧乏侍め。おれも久しく喰ってねえけどよ。ははあ、てめえ、道きくふりしやがって、ほんとうは追剥だな、おう、今宵はいい稼ぎがあったかい。

「もうよい、あっちへ行け、さっさと消えろ」

ふん、顎でしゃくりやがったな。てめえは、顎で人さまに指図するほど偉えのかい、追剥じゃないとすりゃ、試し斬りか？ おじさんよ、斬ってもらおうじゃねえか、腰抜けの竹光侍め。えい、ペッ、ペッ。

「おのれ、武士に向かって唾を吐きおったな。殿から賜った大切な紋付を汚すとは、もはや捨て置けん」

うおっと、と、ヒューと冷たい風が過ぎたな。でもよ、何やってんだい、懐紙で刀を拭いている場合じゃないぞ、達者な居合抜きの腕前は認めるけどよ、達者も勢いが余りすぎりゃ、うつけも同然、おい見てみろ、と言っても自分じゃ見れねえか、おじさん、おのれの首を斬っちゃ困るだろうよ、この先どうすんだい。しかし器用なもんだね、どうやって自分の首まで腕を回したんだい。器用貧乏とはこのことか、貧乏侍め。なんだ、逃げるのか。突き袖にして謡をうなるなんぞ、気取った野郎だ。おれはこれから、品川の虫食い女、じゃなかった虫女でもなかった、えーい、もうどうでもいいや。さーてと、おっ、スー、スー、スースカ、変な具合に息が漏れるぜ、早くこの色男の顔を女に見せなくちゃ、でもよ、おっとと、首が勝手に横を向きやがるんだ、歩くときぐらい正面に向いてもらいたいね、危なくてしょうがねえや、川でも飛び込んだら、おだぶつだ。

なんまいだーなんまいだ、命は大事にしなくちゃな。おっとと、なんだいおれの首は、やけに行儀が悪くなりやがった、普段からちゃんと躡けておけばよかったな。うへ、落っこちまうじゃねえか、このおれに断りもなしによ。こんなガタつく首じゃ、不便でしょうがねえや。どうしたのかね、なんだか襟のあたりが、ネチャネチャ、ベタベタするぜ、おっ、おっ、斬りやがったな、ちくしょう、芋侍のやつ。斬るなら斬るで、口上くらい言ったらどうだ。なにしろ、首がかかってんだからな。最近の侍はモラルにかけろぜ。あーあ、そんじょそらのボンドじゃ、いくら強力でもくっ付かねえだろうな、アロンアルファ・エクストラもふたを締め忘れて、乾いた古いやつしかねえし。

仕方ねえ、とりあえず両手で押さえるか。おう、何だ、ジャンジャンジャン……、半鐘の音だな。こりゃいけねえ、まずいところに火事が起こったな、へっ、大勢逃げてくるぜ、混み合ってきた

な、おい、押すな、押すな、危ねえじゃねえか、こっちは、壊れ物を持っているんだからな、命より大事な壊れ物だぜ。ちえ、ぐらぐら落っこちちゃうよ、胴体も胴体だ、ちゃんと首を見張っててくれなくちゃ、どだい胴体とはいえんぞ。

そうか、そうか、よいしょ、首を外して、こうして提灯にして運びゃ、具合がいいや、ほい、ほいと、上の方がやけに涼しくなったな、まあ、いいや。ご免なすって、どちらさんも、ご免なすって、通しておくなさいよ、おい、なんだ、なんだ、おれの真似をしているやつがいるぜ、ちょっと、そこの先に行くおっさんよ、おっ、おっ、なんだこいつは、丸太ん棒じゃねえか、また会ったな、おっさんも首を提灯にしちゃったせいか、背はへこんだな、当たり前だけだよ。

「なんだ、さっきの無礼な商人か、あっちへ行け」

バカ侍よ、先におれが行くと決めている道だぜ。

「スース、スース、息が抜けて何を言ってるのかわからん。そもそも、どこから喋っておるのだ。提灯が口を利くとは、無礼千万、何事だ」

ばかたれめ、何を言いやがる、お互いさまだろうが、第一よ、てめえのせいだろうが、首提灯侍め、首提灯はおれも同じか。へっ、みっともねーことしやがってよー。もう、女は諦めた。ちくしょう、こんな提灯、みやげにもできねえ、あちち、火の粉がきやがったぜ。

おい、どけ、どけ、こっちは先を急いでいる身なんだ、もうとっくに先がなくなっちゃったから、なおさら先を急ぐんだ、先とはそういうものなんだ、わかるか、ばかものどもめ、ちえ、悔しいから、歌でも唄っていくか。

ああ、それ、それ、酔っ払い、お甲い、お侍、お甲い、それ、それ、酔っ払い、お甲い、お侍、お甲い……よっぱら、い、い、スースー、スース……。

〈寸感〉

「首提灯」のかなり大胆な改変だと思うが、「マジックリアリズム」の私家版の用例をこんな素材から作ったことは、はたして快挙なのか軽挙なのか愚挙なのか。六代目の三遊亭圓生と八代目の林家正蔵の名高い「首提灯」の高座があるが、どちらのオーディオ・ブックも笠間が借り出した記録はなく、何をテキストにした話なのか判断がつかない。しかし、いま再読してみたのだが、細部を過剰に膨らませた野放図な擬作は、リアルな超常性が気色悪さと紙一重の笑いを誘う。

ところで、9の呪いはどうなったのか。夜更けの妄念も朝を迎えてしまうと（ただいま7時15分）、まさしく深夜のマジックが解け、リアルな陽光の眩しさを浴びるなかで、収縮してしまった。それでも、告別としての9という数字について言えば、「首提灯」の末尾で酔っ払いが雑踏で叫ぶ、「こっちは先を急いでいる身なんだ、もうとっくに先がなくなっちゃったから、なおさら先を急ぐんだ」という超論理の台詞は、マーラーが交響曲第十番を未完のまま世を去った生涯と（ちなみにブルックナーは第九番の第四楽章が未完のまま終わった）、アイロニカルに呼応をしているかもしれない。と、一応は真面目に対応しておく。

32 「リア王の母」(メモ)

(9冊目、9ページ)

31で述べたように、これは構想メモのような形で半ページほどのスペースに記載され、しかも斜線を引き、取り消しの扱いになっていたものだ。「ご免なすって、どちらさんも、ご免なすって」を

読むかたわら、たまたま目についたに過ぎないが、この案を引き取って、東の間、私自身がアダプテーションを試みようかという思いが揺れた。東の間に過ぎなかったのは、シェイクスピアの悲劇の中でも、『リア王』はとりわけ複雑なサブプロットを持ち、その創造的改変のやっかいさを予期したからだ。というか、このことに限らず手の込んだ操作を要することは、何につけ億劫な気分がどんよりと心中に居座っているに過ぎないのだが。

笠間の書いたメモ書きに触れる前提となる『リア王』の要点を記しておきたい。古代ブリテン島の老王リアは退位を決意し、王国を三分割して3人の娘たちに自分への愛情告白をさせ、その孝心の篤さに応じて領地を与えると宣言する。長女ゴネリルと次女リーガンは巧みな美辞麗句で老王を満足させる。ところが末娘のコーディリアだけは、一切の虚飾をまじえず、その愛は子としての義務以上でも以下でもないと言明する。リアは期待を裏切られて激怒し、ただちにコーディリアとの血縁を断つと宣言する。領土と王権は二分され、姉たち2人のものになる。しかし2人はいったん領土を手に入れると、リアを虐待し、従者の数も削減してしまう。拳句の果てに、姉妹は結託して悪計をめぐらし、父王を追放する。

リアは娘たちの仕打ちに悲憤し、この世のすべてを呪いながら、嵐の夜の荒野をさまよい歩く。狂乱の姿となった父王のもとに駆けつけたのは、縁を切った最愛の娘コーディリアであったが、この先に大きな悲劇が待ちかまえている……。

「ブラックノート」に記された文は以下の通り。

「リア王の母」(メモ)

日本の戦国時代に舞台を設定した黒沢明監督の『乱』。三姉妹は息子に変更。孝虎、正虎、直虎。ならば、ゴネリル、リーガン、コーディリアは、リアの3人の母に変える設定はどうか？ この場合、リアは精巧なAI(レプリカント)、設計はゴネリル、制作はリーガンが担当。コーディリアは、姉2人の真意がわからず、消極的で成り行きを傍観。リアは3人の感情移入を防ぐため、老人の姿に造形。すぐれたインテリジェンスを備えているが、一つ設計ミスあり。人間の感情を学習していつてしまい、だんだん母たちの喜怒哀楽の感情の増幅装置と化す。乱高下する気分の拡大と喧騒。疎ましく思ったゴネリルとリーガンはリアの廃棄を決定。解体作業の前夜、コーディリアはひそかにリアを抱きかかえ、屋敷から逃亡を試みる。だが、高性能であってもリアはコーディリアの心情が解析できず、倒錯的な事件を招き、悲劇的な結末。

〈寸感〉

AIリアの先行きもさることながら、斜線で消してあること自体が思わせぶり、放棄した意図が判らない。先の私の消極的な心向きと似ているかもしれない。原作の『リア王』は、3人の娘たちをめぐって進行する物語の主筋のみならず、2人の息子たちや家臣の入り組んだ人間関係の確執といったサブプロット、さらに重要な道化の役割など多岐にわたって創案しなければならず、煩勞を厭いメモ段階で終えたのかもしれない。

笠間保はどの版で『リア王』を読んだのか、例によって貸し出しノートを確認したのだが、記録はない。彼自身の本だったかもしれない。なぜそれが気になるかと言えば、私の持っている本のうち、大場建治による『対訳・注解 リア王』(研究社)ならば、次のような書き付けを挿みこんであったからだ。

もしこの劇に家族論的なアプローチをするのならば、脇筋のグロスターの父子問題も無視できないし、さらに道化的「さかさまの世界」からの視点も興味深いものがある。「愚者の王国は、反秩序の王国、つまり一種の〈さかさま世界〉であって、道化の歌の中でリアは一人の鞭打たれる子どもであり、娘たちは母親である。

(M・C・ブラッドブルック著『歴史の中のシェイクスピア』岩崎宗治・稲生幹雄訳、研究社出版)

紙片はそのまま入っていた。笠間保の AI リアは、映画の『乱』から発想が4回転ひねりのようにジャンプして、思い到ったのだろう。

33 「神保町で声を拾う」

(19 冊目, 19 - 26 ページ)

もはや9という数字への特別な妄念など、あっけなく消えてしまったが、出がけに鞆に入れてきたノートが19冊目、電車の中で開いた場所が19ページ。だからどうなのだ、となるわけだが、このようなさしたる意味のないことをわざわざするのは、隠れた意味を呼び寄せようとか、何がしかの奇縁に遭遇しようと思うからだ。ところが、結局のところ意味のないことに帰着するのであるから、ありていに言えば、この振る舞いは、「ブラック・ノート」への厭きの兆しかもしれない。それでも、神田神保町の古書店街で遭遇した出来事のスケッチを読むと、私にとって長年なじみの場所から、いつもと異なる声が聞こえてきて楽しめた。以下、引用は全文。

「神保町で声を拾う」

K 書店

20年ほど前のある春の日。靖国通り沿いのK書店に入ると、店主が浮かぬ顔で常連らしい客と話をしていた。壁の片面の棚は空になっていて、閉業まじかの店の雰囲気だった。私は落ち着いた気分で反対側に残った本を眺めた。

「そりゃ、買ってくれるのはありがたいけど、気味が悪いですよ。とてもふだん読書なんかしているように見えない、黒っぽいスーツを着た男が2人、店に入ってきて、この棚にある本、ぜんぶ買うから急いで車に入れてくれって言うんですよ。通りにワゴン車が2台、止めてありました。わけが分からないし、からかわれているかと思って、ぜんぶの本と言われても意味不明なので、どのようなジャンルの本ですか、と尋ねたんです。そうしたら、何でもいいから、急いでこの右側にある本を車に入るだけ積んでほしいって。でも、お客さん、値段の計算があるので、夕方くらいまで待っていただかないと無理ですって答えました。何か気味悪くて、早く退散してくれなかな、と思いましたよ。そうしたら、アタッシュケースを開けて、むき出しの札束を二つ、どんとカウンターに置くんです。200万円あるから、これでまけてくれませんか、とても丁寧な口調で頼んできました」

「へー、200万円。何ですか、その客？」

「まったくね、ちょうど通りかかったY書店の青年にも助けてもらって、運びこみましたけどね。体がどうのこうのより、すっかり気持ち疲れちゃって。もう今日はおしまいにしたい気分です。あっ、すいません、お客さん、お待たせしちゃって。でも、ごらんとおり、すっかりからっぽで、お探しの本、何かありましたか？」

「ええ、この『バルテュス頌』、いただきます。いま、そばでお話を聞いていたんですが、何者なんですかね。そんなめっちゃくちゃな本の買い方をして」

「何でしょうね、まったく」

「テレビとか、映画関係の人じゃないんですか。古書店のセットが急に必要になったとか」

と常連客が言った。

「どうですかね、それだったら、うちにロケに来るほうがずっと安上がりでしょう」

店主がそう応じたとき、かつて錦糸町の飲み屋のママさんから聞いた話を私は思い出した。

「大阪の話ですけど、裏ものばかり扱っているボルノショップに、警察の手入れが入るという内通があって、大急ぎで古本を大量に買いあさって、あつという間に古書店に変身させたそうです。月の売り上げが2000万もあった店とか。ただし、書店のシールが貼ってある本はだめですから、お宅みたいに鉛筆で値段が書いてあるやつがいいのです。きっと下見もしたんでしょうね」

「はあ……」

と店主は言いながら、眼鏡を外して額をハンカチで拭い、急にだまりこんでしまった。理由はわからない。それから何年たってからだろうか、K書店は閉店し、跡地に定食屋が建ち、それも消えてラーメン屋になった。

T書店

店頭のパネルを含め、品ぞろえは魅力的で、私のようにブックマニアとは程遠い人間から見ても気になる店で、棚の奥へと吸い込まれてしまう。ただし、この店の親父は見た目も口のきき方も無愛想の標本のような人物で、気の弱い客などは、金を払うときでさえ、びくびくすることになる。あげくのはてに気圧されて、客のほうがお礼を言ってしまうりする。これは一度、目撃したことだ。それでも、さすがに最近は歳を取り、かつてのように本の戻し方が悪いと、睨みながら舌打ちして警告するといった不機嫌な態度を見せることは少なくなった。妙なもので、客としては少し寂しい気分になるのだから、人の心は我がままで、贅沢なものだ。

その日も、親父が店番をしていた。置物のように、ただそこに鎮座していればいいのだが、相変わらず不機嫌さの放射線をあたりに放っている。電話が鳴り響く。親父は受話器を取らない。いつまでも鳴り続ける。外で本の整理をしていた店員がしぶしぶと入ってきて、代わりに受けようとした。すると親父は何も言わずに、珍しく気弱な顔で、放っておけと手で合図した。しつこいクレイマーでもいるのだろうか。本当の理由は判らない。店を出た後、頭の芯のほうに電話の呼び出し音がしばらく残った。

X書店（一誠堂の近くだが、店名を忘れた）

同じ日。入口近くにセット物が積んである。私とは無縁なものばかり。予算もないし、置くスペースもない。右の文庫の棚に直行。昔の旺文社文庫で、本橋成一の写真の入った西田敬一著『サーカスがやってくる』を400円で見つけ、カウンターに向かいかけたが、正面の壁の貼紙と出っくわした。「万引きは犯罪です！ 今月の検挙数、2名」と大書した警告文だ。やめておけばいいものを、右手に旺文社文庫を持ったまま、私は貼紙にしみじみと見入ってしまった。今月はまだ6日しかたっていないのに、2人ということは、月に10人になる計算だ。発覚しないとすれば、店には打撃だろう。でも、この店だけの検挙数か、それとも神保町書店街全店の総数かは不明だ。

ふいに我に返ったとき、男女の若い店員2人の視線が刺してくる。その視線を押し返してカウ

ンターに近づくのが面倒になり、『サーカスがやってくる』を棚に戻しにいった。はからずも私は挙動不審の人物となったわけだが、なぜか芝居の舞台を下りたばかりのような昂揚した気分だった。

天ぶらの「はちまき」で遅い昼食をすませ、S書房に立ち寄ると、先ほど買うはずだった本橋成一の写真入りの文庫が300円であった。こんなことが起こる日もあるのだ。

N書店

これも同じ日。20代半ばの女性店員が店主に電話をしていた。

もしもし、店長、いまどこですか？ さっき値付けをしてほしいというお客さんが来て、1時間以内に返事が欲しいって言うんです。電話できます？ それで、1時間以内に値がつけられないんだったら、無理だという電話がほしいそうです。40代初めくらいの人です。ええ、男性。言ったとおり、正確に仕事をしてほしいって、念を押していました。ああ、映画のパンフばかり20冊くらい。そうですよね、うちじゃなくて、ヴィンテージさんとか、矢口さんに行くほうがいいのに。いえ、いえ、そんなことは言ってません。ざっと見て、珍しいものはなかったです。よくて100円、悪ければせいぜい、10円くらいですかね。ジム・ジャームシュの「ストレンジャー・ザン・パラダイス」が入ってましたけど、どうですか？ ああ、そんなもんですか。

えっ、はい、はい、すいません。だいじょうぶです。それで、あなたの名前を聞かせてほしいって、言われたので、斎藤ですって言ったら、ちゃんと答えてないじゃないかって、いやな感じで文句を言うんです。名前って聞かれたら、苗字じゃなくて、下の名ですって。わたし、笑っちゃって、それ、必要ですかって言い返したら、正確に仕事をしろと言った意味がわからないのかって、すごいです。ちょうど、他のお客さんがカウンターで待っているんで、そちらの方を先に接客したら、じゃ、1時間以内に連絡を頼むぞって、出ていきました。めっちゃ気持ち悪い客。はい、そうしてくれますか。わたしから電話するの、いやですからね。じゃ、お願いします。はい、わかりました、はい。(電話を切って) あーあ、めんどくさー。

<寸感>

読みながら、神田神保町の古書店街を一緒に回っている気分になった。イニシャルで記された古書店名もほぼ推測がつく。Xと記された店もあそこかな、と思いつかぶ。1日でこうした変化に富んだ出来事をキャッチするとは、ある種の集音マイクのように意識が働いていたのではないだろうか。そこに感情の起伏が同伴しているところが興味をそそる。

K書店の一括買い上げのミステリアスな話は、名古屋の古書店で似た例があったと誰かから聞いた覚えがある。私は全くの下戸なので、酒場のママが情報源だったのではない。非合法のポルノショップが関与していたかどうか知らない。K書店は特に専門性の高い店というわけではなく、ノンジャンルで棚を作っていたので、普通の古書店に偽装するには狙いをつけやすかったのだろう。

T書店の無愛想店主、私も知っているが、これは仕方ない。古本屋の親父の古典的イメージを踏襲するもので、今や無形文化財くらいに考えたほうがいいだろう。とは言いつつ、気持ちは判らないでもない。私にも実に苦手な店主が3人いる(1人は新刊本の書店主)。向こうも同じ感情を持っているのだから、お互いさまだと思う。ならば、なぜそんな店にわざわざ足を運ぶのか。本の匂いに惹きよせられるからだと言う他はない。

X書店の貼紙、「検挙数」という警察用語が、書店という豊潤な言葉にあふれた空間に君臨している。

その剥き出しの突出した活字が気分を悪くするのだ。しかし、被害が出ている以上、これも仕方ないだろう。

いくら店員の「視線を押し返してカウンターに近づくのが面倒」になったとはいえ、本を戻してしまふとはいささかの驚きだ。私のように気弱な人間は、あわててカウンターに持っていくと思う。笠間保は「挙動不審の人物」に誤解されることを露悪的に楽しんでいたのかもしれない。まれにそのような人物はいるものだ。

本橋成一の写真にも関心があるらしい。私は持っていないが、『サーカスの時間』という写真集も筑摩書房から出ていたはずだが、笠間は知っていただろうか。ついでに言えば、『サーカスがやってくる』は1982年に刊行された文庫のようだが、その後『サーカスがやってきた』の類似タイトルで複数の絵本も出ている。さらに、亀井俊介のアメリカ大衆文化論が『サーカスが来た!』（岩波同時代ライブラリー、1992／平凡社ライブラリー、2013）、1996年に神奈川県立近代美術館と兵庫県立近代美術館で開催された展覧会のカタログも『サーカスがやって来た!』（私の大好きな美術展カタログの一冊）であり、テーマ別専用棚を作れば、次々とサーカスがやってきて賑やかなものになるであろう。

てんぶらの「はちまき」は江戸川乱歩が最良にしていた老舗だ。懐具合により、奮発するなら池波正太郎の通った「山の上」だろうか。若いころから私がよく通ったカウンター席だけの格安の天ぶら屋、「いもや」は何年も前に閉店した。閉店で思い出した。やはり「万引きは犯罪です」の警告文を店内のいたるところに貼り、棚の前に未整理の本をうず高く積み上げた古書店も中野にあったが、これも閉店して久しい。

N書店、古書店にはこうした逸れ者の出没が珍しくないのだろう。本の売り買いではなく、ただ話がしたいだけで立ち寄る客も多い。杉並の某書店で聞いた逸話がある。各大学入試の現代国語(現代文)の過去30年間の問題を調べ上げ、まるで暗記した円周率を自慢するような調子で、出典となった著者・著作を延々と披露してくる塾講師がいたという。あるいは仙台の古書店の例だが、自分の好きな詩集が痛ましい状態で棚にさしてあると、おずおずとカウンターに本を持って現れ、手提げからグラシン紙を出し、かわいそうなので表紙をかけていきたいと申し出る初老の女性がいたとか。気がつかずにすみません、ぜひお願いしますと店主は応じたそう。こうして記憶をたどると、いずれも笠間自身が書きそうな小話に思えてきた。

N書店の女性店員の会話のなかに、「ああ、そんなもんですか。えっ、はい、はい、すみません。だいじょうぶです」とあるが、よその客が店にいるときに、具体的な値付けの話は避けると店長に注意されたのだろう。実際、ジム・ジャームシュの「ストレンジャー・ザン・パラダイス」のパンフレットが、「ああ、そんなもんですか」となれば、売る気はないにせよ、野次馬的な好奇心が湧くものだ。

34 「サングラス幻想」

(19冊目、27、28ページ)

「神保町、声を拾う」に続くページを開けてみたところ、閉店からの連想なのか、新宿のサングラス専門店の話が記してあった。

「サングラス幻想」

新宿西口の思い出横丁の南側の路地から、東口に抜ける地下通路がある。池袋駅の北側にも似

た構造の地下道があるが、まったく街の温みと情緒性に欠け、新宿とは比べ物にならない。その新宿の地下通路の出入口近くに、サングラスの専門店があった。通路からは小便の臭いが漂ってくるような人間的情感に満ちた場所だ。小さな店舗だがあらゆる種類のサングラスが飾られ、遠目から店をフレームで囲む感覚で眺めると、ポップアート風の絵が出来上がった。写真に撮ったこともあるのだが、統一感に頓着しない弾けるような彩りの面白みはなかった。客で賑わっている光景は見たことがないし、私自身も買ったことがない。妙なことに店主の姿らしきものも見かけたことがないのだ。

しかし、いつもこの店の前を通る楽しみがあった。客を呼びこむために、戯れ句を書いた大きな短冊が下がっているのだ。本気で宣伝効果があると考えているとも思えず、むしろいささか投げやりにも感じられる作風で、そこに素朴な味わいがあった。すべてを記憶しているわけではないが、このような句の短冊が風に揺れていることもあった。

サングラス振り返るだけで罪なやつ

サングラスは不良がかった悪っぽい男がかけるものだった。昭和に青春時代を送った旧世代の持つ、このファッションの小道具に向けた通念やイメージが反映している。サングラスをかけ、少し危険な匂いのする男として女性の心を掴もうというわけだ。映画の1シーンのようでもある。湘南海岸あたりで、どこかのお坊ちゃんが不良を気取り、ばかでかいオープンカーに乗って、女の子の前を通り過ぎてから振り返り、芝居がかった仕草でサングラスを外して声をかけるとか。そんな男への羨望を読み込んでいたのかもしれない。

サングラスに対する世代感覚が現れているという点では、次のような句もあった。

一生に一度はかけたいサングラス

真面目で気の弱い男が、満を持してサングラスをかけ、悪ぶった男として往来を闊歩する。そんな思い切ったことを一生に一度はやってみたいなー、というわけだ。単純な句だが、ある世代のサングラス幻想を簡潔に伝えている。

かつてサングラスは夢の小道具だったのだ。それを夢として感じられる男たちを励ます店だった。そんな世代はとっくに地上から退場し、夢は遠く去り、あの華やかな小さな店もいつしか消えた。

〈寸感〉

小規模の店が集まった地下通路近くの界隈のことは、私もよく覚えている。しかしサングラス専門店については、あったようななかったような朦朧とした記憶のなかに沈んでいる。

私は地下道の出入り口から数件ほど離れたところにあるペットショップの方に注意が行き、檻の中で暴れたり眠ったりしている子犬たちに声をかけたりしていたので、サングラス店は見逃していたのかもしれない。それはともかく、私よりも一回り若く、還暦を数年過ぎた程度の人間に「生真面目な昭和の旧世代の意識」などと書かれると違和感があるし、わかった風のことを言うんじゃないよ、と腹も立ってくる。もっと上の世代ならば、サングラスは「色眼鏡」と和語になるだろう。

改めて読み返してみればノスタルジックな気分が滲み出てくることも確かだ。忘却の淵に眠ってい

た私自身の体験的な記憶がありありと甦り、実感を備えた思い出に再会した気分になってしまうのは、
どういうわけだろう。店先でサングラスをあれこれ試しては、眩し気に鏡を覗く、気弱そうな自分の
表情さえ浮かび上がってきそうになる。前にも似たことを述べたような気がするが、私は「ブラック・
ノート」の断章を追っているのだが、向こうでも私を追尾しているのではないかという思いに捉われ
ることがある。「ブラック・ノート」は、〈読む・読まれる〉の関係を誘発し合う、相互感応の場なの
だろうか。

35 「不採用通知の模範書式」(仮題)

(19冊目, 29, 30 ページ)

市ヶ谷の私学会館の喫茶室。編集者と原稿(私ではない)の相談があるのだが、かなり早く着い
てしまった。そこで、「サングラス幻想」の次のページを読むと、絶妙のタイミングでこんな不吉な
短文が現れた。タイトルは書いてないので、仮題をつけておく。

「不採用通知の模範書式」(仮題)

ジェームズ・ジョイスの短編集『ダブリナーズ』は、出版社から22回の不採用通知を受けた
という。743通もの不採用通知書を持つミステリー作家もいるらしい。そうした背景から、アメ
リカの作家で編集者のドン・ゴールドという人が、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』誌に、
どの編集者でも利用できる「不採用通知の模範書式」を提案した。「拝啓、貴原稿を読む機会を
与えて下さり、感謝致します。次の理由により、貴原稿を返却致します」の挨拶文に続けて、10
項目の理由が並べてあり、必要なところの□に✓を入れて返信すればよいだけの便利なテンプ
レートだ。

最初の2項目は「醜い作品であり、出版不可能で、文明に対する侮辱であり、焼却されたし」
と「遺憾ながら、凡庸な二流作品です」という簡潔なもので、はっきり言えば「遺憾ながら、凡
庸な」タイプの通知であろう。

面白いのは、編集者が弱気になっている返信である。「人生は退屈な経験です。私はとても疲
勞しているので、この原稿が当然受けてしかるべき注目を与えることはできません」とか、「自
分自身の問題を抱えていますので、貴原稿に専念することはできません。今、私を悩まさないで
下さい」とか。

あるいは、逆に威張った文面もある。「私は重要な地位にある人間ですが、あなたはそうでは
ありません。有名になってから電話して下さい」といった具合に。私の年下の友人で広告関係の
仕事をしながらSFを書いてきた人物の場合、これとよく似た不採用理由を言われたことがある。
「無名の貴殿のSFを出版するほど、弊社には物理的にも時間的にも余裕はありません。貴殿が
10万部売れる書き手であるならば、心して刊行を検討したいと思います。その折は、ぜひ弊社
にもご連絡を賜りたいと存じます」と。きっと悔しかったはずだ。しかし、残念ながら、世の中
というものは、こうした侮辱に対する復讐劇が成り立った例は皆無に等しい。

〈寸感〉

真面目なような、ふざけているような、この「不採用通知の模範書式」の出典は、貸出ノートにも
記載があり、すぐに判った。ロバート・ヘンドリックソン著『英米文学エピソード事典』(横山徳爾訳、

北星堂書店)である。しかし、どうせなら書き手を天才と思わせ、驚嘆させる返事もあればよかった。「原稿拝受。編集部一同、喜びで満たされています。あなたはまぎれもない天才と確信します。ただし、一つ大いに残念なことがあるのです。ちょうど一週間前に、何とあなたの作品と一字一句同じの大傑作が届いてしまいました。タイトルは、『ドン・キホーテ』という長編小説です。惜しい！遅かったですね。しかしながら、あなたが天才であることは証明されました」などは、どうだろうか。汎用性に欠け、「模範書式」にはならないかもしれないが。

走り書きとはいえ、最後に「世の中というものは、こうした侮辱に対する復讐劇が成り立った例は皆無に等しい」と断言するのは早計だろう。ここには、小説化できるモチーフが内包しているはずだから。私自身は関心のある素材ではないので、書くつもりはない。

ところで、私学会館の喫茶室で会ったベテラン編集者に、「不採用通知」の文例の話の向けると、忙しいので対応してられず、何も返事をしないのがテンプレートだという、誠に現実に即した身も蓋もない話だった。続けて、アメリカの編集者で作家のアンドレ・バーナードの書いた『まことに残念ですが……』(木原武一監修・中原裕子訳、徳間書店)という不穏なタイトルを持つ本の話に移った。今では不朽の名作と認められている本に、当時の出版社が送った「不採用通知」を広く集めた本だ。例えば、アガサ・クリスティーの『スタイルズ荘殺人事件』には、「たいへん興味深く、いくつか良い点もございますが、いまひとつ弊社の傾向に沿っているとは申せません」と気の抜けた返事があり、ジェイムズ・ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』に対しては、「結末に来て、話は完全に崩壊し、打ち上げに失敗したロケットさながら、文章も思考もこっぴみじんに砕け散る」と逆に気持ちが入りすぎて、文学史に残る輝かしい不採用通知文となってしまった例もある。

「ブラック・ノート」に言及のあった、『ダブリナーズ』に関しても後日談が紹介されている。多くの拒絶反応を受けてようやく刊行されたものの、ある親切なダブリン市民が全冊買い占めて焼却してしまったのだ。その焚書の行為を「新手の個人的な異教徒火刑だ」とジョイスは述べたのだった。

ついでに記せば、私が編集者に託した若き批評家の原稿『怠惰の文学——無為の系譜をたどる』への返事は、いつ届くだろうか。もし見送りとなれば、私が不採用通知文を心つくして代筆しようと思う。

36 「あの絵のなかに入りたい」

(19冊目, 31, 32ページ)

市ヶ谷から帰宅の車中、次ページを開く。こうした順を追った読み方は珍しいのだが、持参したのは19冊目のみ。改めて気がついたのだが、特に内容的な連続性はなく、実質的にはこれまでと同じく、アトランダムに読む場合と変わらない。現れたのは、バスのなかのこんな光景だ。

「あの絵のなかに入りたい」

ある晩春の午後、バスは渋滞の車列に吸収され、車体半分だけ右折車線に入ったところで動かなくなった。心なしかバスが右に傾いているように感じられる。何かの工事予告があったような気もするが、渋滞の理由は判らない。車内はほぼ満席だが静かで、生ぬるい空気が漂う。

車の渋滞となると、アルゼンチンのフリオ・コルタサルの小説「南部高速道路」を私は思い出す。ある八月の日曜、パリ郊外の高速道路で始まった渋滞が、一日、さらに一日と何週間も何カ月も続き、季節が夏から冬に移っても解消しない。高速道路上にサバイバル共同体もできるが……。

このバスもまだ動かない。

通路をはさんだ私の隣席に、若い母親と5歳くらいの女の子が座っていた。携帯電を覗き込んだ母の耳たぶには、サクランボのようなイヤリングがある。

「ねえ、お母さん、あそこ見て、ほら」

少女の指さす方を見ると、ビルの壁面全体に、遊園地の看板や幼稚園の遊具で見かける児童画のような絵が広がっていた。真っ赤な太陽と黄色い星々が宙に浮かび、緑の帯状の雲の上で身体をくねらせて、カバが飛んでいる。

「マホ、あの絵に入ってみたい。すぐ入りたい」

と女の子は母親にせがむ。

「そんなこと、ムリよ」

母はスマホ画面のメッセージに応えながら、そっけなく言った。

「ドアがかいてあるでしょ、きっと、あそこから入れるんだよ」

「ムリなものは、ムリなの」

母の声は独りつぶやくような調子だった

「だって……」

と言いながら母親を見上げていた娘の視線が、まっすぐ私の顔をとらえた。

「ムリ、ムリって、それっばっかし」

女の子の声が心なしか大きくなった。そして幼い口から狙い澄ましたような言葉が飛び出た。

「おかあさん、子どもの夢をこわしてはいけないでしょ」

私は不意を衝かれ、一瞬にして、思考の流れが淀み、小さな決壊が起こった。少女の「子どもの夢」は、使う好機を待ってあらかじめプログラム化されていた言葉のように思えた。

母親に反応はなく、やや間があって、溜め息のような囁きが漏れた。

「こっちに相談されたってねー、答えようがないよ。相手にはっきり言うしかないのに」

「ヒロシおじちゃんのこと？」

と娘は母の顔を覗きこみながら訊ねた。

「そうだよ」

「そうか。でも、ヒロシおじちゃんは、子どもの夢がちゃんとわかる人じゃない？」

「マホ、うるさい。静かに窓の外でも見てなさいよ」

「でも、バス、ちっとも動いてないよ。ねえ、お母さん、やっぱりマホ、あのドアを開けて、絵の中に入りたい」

「逃げたって、どうせムリに決まってる。困るな、うちだって、たいへんなのに」

「あっ、見て、見て、ドアから、なにか出てきたよ」

少女の視線に誘われ、私も壁画に目をやった。

ふいに私の気分が渦巻く。

波模様のドアが開き、背中の上昇した大きな口のある巨獣が現われた。すると私の気分の動揺が夢見をあおるかのように、バスは勢いよく右折して、猛スピードで樗並木を抜けた。

街路も家々も午後の陽が降りそそぎ、車内の奥まで強い光が射しこむ。

運転席のフロントガラスを突き抜けた彼方の空に、太湯と星と帯のように広がる雲がある。バスはいま、風を得て上空に向かう。雲を越え、宙に手足を跳ね上げ、尻を振りながら踊る巨大なカバが近づいてきた。

〈寸感〉

帰路の電車もまた、午後の陽ざしを浴びて走っている。会ったわけではないのに、母娘の会話の聲が耳元に残った。ほほえましさとは結びつき難い印象だ。それぞれに何か課題を抱えている。しかしこの親子の本当の問題は、2人を越えたところにあるようにも思える。

微睡が来そうになった。後で読み返すかどうかは判断がつかないまま、私はこのページに付箋を貼り、「ブラック・ノート」を閉じた。車内のざわめきが遠ざかっていく。

[続く]

執筆者について――

中村邦生（なかむらくにお） 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に、[『転落譚』](#)、[『チェーホフの夜』](#)、主な批評に、[『未完の小島信夫』](#)（共著）、[『『罪と罰』をどう読むか』](#)（共著）などがある。